

## 屋久島で観察された鹿児島県初記録のハシブトゴイ *Nycticorax caledonicus*

杉本 和賀子<sup>1</sup>・所崎 聡<sup>2</sup>・和田 裕介<sup>3</sup>

### Nankeen Night Heron *Nycticorax caledonicus* of the observed Kagoshima Prefecture, first recorded in Yakushima

Wakako SUGIMOTO<sup>1</sup>, Satoshi TOKOROZAKI<sup>2</sup>, and Yusuke WADA<sup>3</sup>

#### はじめに

屋久島は鹿児島県大隅半島佐多岬より南南西60kmの沖あいに存在する面積504.3km<sup>2</sup>、周囲130kmの円形に近い形をした島である。島の約90%が森林で、ほぼ全島が山地である。海上からいきなり伸び上がるように1000～1900mの山々が連なり、急峻で険しい地形を形成している。島の中央付近には九州最高峰の宮之浦岳(1936m)がそびえる。全島が屋久島町に属し、島の21%が1993年にユネスコ世界自然遺産に登録されている。

屋久島の安房川でハシブトゴイ *Nycticorax caledonicus*(以下本種)と考えられるサギ類の1羽(以下本個体)を観察した。以下にその記録を報告する。

#### 観察者

杉本和賀子, 和田裕介

#### 観察日時・場所

2016年9月5日から7日。鹿児島県熊毛郡屋久町安房(30° 19'12"N. 130° 38'40"E)。初認の5日はカヤックで安房川の上流方向に移動中、本個体が約3mの至近距離を左岸側の水面上3.5～5mを河口方向に飛ぶのを目視で確認した。初認時の本個体は一見で見たことがないサギの仲間と判り、ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* と比べてひとまわり大きく見え、体型もよりずんぐりとしていた。6日はスタンダップパドルボートに乗っている時に目視で観察した。そのとき

はスタジイ *Castanopsis sieboldii* の枝に止まっていた。警戒する様子は全くなく、1m近くまで近づくことができた。観察した6日午前中は霧が出て小雨が降り、薄暗い状況だった。7日はデジタルカメラ(Nikon Cp-AW130)を使用して、本個体が梢に止まっている状態で動画の撮影を行った。そのときもカヤックに乗っての観察で、10-20mの距離だった。カヤックからの観察は比較的鳥との距離が近く、本個体も最短で6mくらいまで近づくことができた。またその時は、河岸の林床に下りている状況も観察できた。

#### 形態に対する記述

本個体は頭部が黒く、後頭に白い飾り羽がある(図1, 2)。眉斑は白く明瞭で、目の回りに眉斑と境界が不明な白いアイリングがある。喉、胸、腹にかけては白い。頬から頸にかけて薄い茶褐色で、頭部の黒色部との境界は明瞭である。喉、胸の白色部と頬、頸の茶褐色部はグラデーションを成し、境界は不明瞭(図1)。背中から腰、尾羽、翼上面は濃い茶褐色となり他の部位との境界がはっきりしている(図2)。嘴は濃い灰黒色で下嘴の基部はわずかに緑がかり、太長く、先端に行くにつれ細くなり、尖る。虹彩は鮮やかな黄色。目先に裸出部があり、目に近い部分は緑がかっており、全体には黄色。脚は長めで黄色(図1)。以上の色合いから全体にメリハリのきいた姿をしている。

以上の外観からサギ類であり、体型はゴイサギによく似るものの体色からゴイサギではない。頭部が黒く、

1 屋久島ガイドサービス

2 日本野鳥の会鹿児島、日本鳥学会

3 屋久島観光協会、日本エコツーリズム協会、日本山岳ガイド協会

白い飾り羽があり、上面が茶褐色で腹が白色という特徴から本個体はハシブトゴイと判断できる (Hancock & Kushlan, 1984; 大西・五百澤, 2014)。体羽に幼羽が見つからず、また頭部が黒色で、飾り羽があり、目先に婚姻色の名残があるため本個体は成鳥であると考えられる (Pratt & Beehler, 2014)。



図1 安房川で観察されたハシブトゴイの腹面観  
(2016年9月7日。撮影：和田裕介)。



図2 安房川で観察されたハシブトゴイ背面観  
(2016年9月7日。撮影：和田裕介)。

## 考察

本種は日本国において *N. c. crassirostris* という固有の亜種を有し、小笠原群島煤島、父島の森林地帯に生息していたが既に絶滅している (日本鳥学会, 2012)。そして1989年を最後に記録されていない (大西・五百澤, 2014)。本種は海外では東はフィリピン、ボルネオ東部、スラウェシ島から太平洋南部西はニューカレドニアまで広く分布している。またオーストラリア

大陸の東西の海岸部に分布する (高野, 1981)。現存亜種として5亜種が知られている (Hoyo *et al.*, 1992)。本邦では2013年2月12日に小笠原諸島母島で123年ぶりに記録された (川上ほか, 2015)。もちろん鹿児島県でも屋久島でも過去において記録はない (所崎・山元, 1999; 尾上, 2008)。過去東京都小笠原諸島以外での記録はなく、九州並びに鹿児島県初記録となる。

本個体の外観は下嘴の色を除けば、2013年の小笠原で観察されたハシブトゴイ1羽 (以下、小笠原個体) に酷似している。小笠原個体は *N. c. australasiae* もしくは *N. c. pelewensis* であろうという判断に至っている (川上ほか, 2015)。川上ほか (2015) は *N. c. hilli* と記載しているが、*N. c. hilli* は *N. c. australasiae* と同一亜種を示し、Hoyo & Collar (2014) や IOC の World Bird List などは後者が優先名としているので本文はこれに従い、*N. c. australasiae* を使用する。小笠原個体の属する亜種を絞り込むに至らなかったのはハシブトゴイの他の亜種とフィリピンやボルネオなどに分布する亜種の *N. c. manillensis* の明確な違いが文献上見当たらなかったためである (川上ほか, 2015)。今回、パラオにおいて撮影された *N. c. pelewensis* の写真をネット上で確認出来た (<http://blogs.yahoo.co.jp/ca-siornis1/folder/957317.html>)。その個体はかなり *N. c. australasiae* に似ており背の色はやや赤みのある茶褐色で、側頸部に灰黒色のハーフカラーがある。ハシブトゴイの側頸部のハーフカラーはオーストラリアやフィリピンの亜種にもインターネット上の画像において散見する。ただし、背中の色については、先に上げたパラオの個体は背中に dull maroon と表記される赤みのある茶褐色で Kushlan & Hancock (2005) の記述に一致する。亜種を断定するものではないが、背中の色を重視すると本個体も小笠原の個体も、*N. c. australasiae* により近い色をしている。

筆者は2015年9月後半にニューギニア島イリアンジャヤのジャヤプラ付近で *N. c. australasiae* を2個体観察撮影している。ニューギニア島はハシブトゴイの越冬地であり、観察した個体は本個体によく似ていた。ただ嘴の違いがあり、下嘴の色が黄色く本個体とは異なる。Pratt & Beehler (2014) の図版によるとニューギニア島のハシブトゴイの下嘴は黄色い。これは南半球の越冬期に同地域にこの鳥が飛来する事に起因し、非繁殖期の羽衣を記載しているものと考えた。小笠原個体も下嘴は黄色く同様の外観をしている。本個体は

上下嘴ともに黒いが下嘴の基部は緑がかっているように見える。これは本種の特徴とする記述もある (Hancock & Kushlan, 1984)。9月の上旬に観察された本個体とイリアンジャヤで観察した2個体は、ほぼ同じ時期に見たものであるがこの様な色の違いが確認できる。9月というと南半球では冬の終わりから春のはじめに当たる。そのため繁殖地に向けた渡りは始まっている。本個体は目先の婚姻色の発現も認められるため繁殖地に向かう早い渡りの個体である。そして小笠原個体やイリアンジャヤで観察した個体と異なり、下嘴が黒くわずかに基部が緑であるのはオーストラリアなどの繁殖地での変化の1つと考えた (Slater, P. *et al.*, 2009)。イリアンジャヤの2個体については繁殖羽の獲得が本個体より遅れている。これは非繁殖期から繁殖期への過渡期であるため個体差を生じているものであると考えられる。

#### 謝辞

執筆にあたり平岡 孝氏に資料の収集をお手伝い頂き、ご助言を賜った。また、大谷 力氏にはパラオで撮影された写真資料提供やホームページの記載の承諾を頂いた。池 俊人氏をはじめとして鹿児島県立博物館の学芸員の方々には丁寧なご指導を頂き、貴重なご助言を賜った。お世話になった方々に対して、ここに深甚の謝意を申し上げます。

#### 引用文献

- Hancock, J., Kushlan, J. (1984) *The Herons Handbook*. 288pp., Croom Helm, London.
- Hoyo, J. D., Elliott, A., Sargatal, J. (1992) *Hand Book of the Birds of the World Vol.1*. 696pp., Lynx Edicions, Barcelona.
- Hoyo, J. D., Collar, N. J. (2014) *Illustrated Checklist of the Birds of the World*. 903pp., Lynx Edicions, Barcelona.
- 川上和人・古谷 亘・児嶋 翼・中山文仁(2015) 日本鳥学会誌64 (1): 83-86.
- Kushlan, J. & Hancock, J. (2005) *Herons. Bird Families of the World*. 454pp., Oxford Univ. Press, Oxford.
- 日本鳥学会(2012) 日本鳥類目録改訂代第7版, 438pp., レタープレス株式会社, 東京.
- 大西敏一・五百澤日丸(2014) 日本の野鳥650, 788pp., 平凡社, 東京.
- 尾上和久(2008) 屋久島の野鳥, 121pp., 南方新社, 鹿児島.
- Pratt, T. K., Beehler, B. M. (2014) *Birds of New Guinea Second Ed.*, 528pp., Princeton University Press, Oxford.
- Slater, P., Slater, P., Slater, R. (2009) *The Slater Field Guide to Australian Birds Second Edition*. 416pp., New Holland Publishers, Sydney.
- 高野伸二(1981) カラー写真による日本産鳥類図鑑, 481pp., 東海大学出版会, 東京.
- 所崎聡・山元幸夫(1999) 鹿児島県産鳥類リスト. 鹿児島県立博物館研究報告, (18): 21-42.

